「赭白馬賦」と「雑説」

谷口匡

一、はじめに

以前私は「「雑説」が書かれるまで」（『京都教育大学国文学会誌』第四四号、二〇一六年）と題する拙論（以下「前論」と略す）で、唐の散文家韓愈が「雑説」を書くに至るまでの過程を論じたことがある。韓愈の「雑説」は四篇あるが、私がとり上げたのはその第四、「世に伯楽有りて然る後に千里の馬有り」の名句で始まる、伯楽と名馬の関係を論じた一篇であり、本稿でもそれを指して「雑説」と称する。

「雑説」が誕生する以前にもさまざまな形で伯楽と名馬の話は書かれている。その中で「雑説」が強く影響を受けていると思われるのは、『戦国策』楚策四（三十三巻本による。以下「楚策」と略す）で汗明が春申君に語った故事であり、そこでは不遇な名馬と伯楽との出会いが才能ある自分と上位者の遭遇の喩えとして述べられ、いわば「雑説」の原型ができあがっている。この「楚策」は下位者が上位者を説得しようとする弁論の「説」だが、漢代以降、文人によって独立した散文作品が書かれる中で、それらにも影響を与えてきた。すなわち「前論」を補訂しつつ述べると、前漢では枚乗の「七発」（『文選』巻三四）、東方朔の「七諫」怨世（『楚辞』）、賈誼の「屈原を弔う文」（『文選』巻六〇）、後漢では張衡の「思玄の賦」（『文選』巻三七）、東晋では劉琨の「盧諶に答うる詩幷びに書」（『文選』巻二五）、西晋では袁宏の「三国名臣の序賛」（『文選』巻四七）など、各時代のさまざまなジャンルに「楚策」を意識した不遇な名馬が登場している。

盛唐になると杜甫が「天育驃騎図の歌」（『杜詩詳注』巻四）を作った。これは七言古詩の形式で名馬はいても伯楽がいない現状を嘆いたものである。『九家集注杜詩』では

注に「楚策」を引き、やはり汗明が語った故事に繋がる作品と考えている。

そしてこうした流れを受けて「雑説」は書かれた。すなわち、もともと弁論の「説」だった「楚策」は、その後、歴代の文人のさまざまなジャンルの文章の中に展開し、杜甫の詩を経由して「雑説」という「説」ジャンルに生まれ変わったと見ることができよう。

ところで南朝宋の顔延之が「赭白馬の賦」（『文選』巻一四、以下「赭白馬賦」）という作品を書いている。これは馬を題材とした代表的な「賦」であるが、修辞を追求した応制の作であり、明確な主張をもって書かれた古文の「雑説」とは対極の位置にある。今、この作品をとり上げるのは、馬という題材を用いながら「楚策」以来の不遇な名馬をテーマとする系譜とどう関わらないかを考えることにより、改めて「雑説」という「説」ジャンル作品の意義について明らかにするためである。まずは顔延之の「赭白馬賦」がいかなる作品で、どのように書かれたかを概観しておきたい。

二、「赭白馬賦」の内容と評価

顔延之は東晋孝武帝の大元元年（三八四）に生まれ、南朝宋孝武帝の孝建三年（四五六）に没した。その性格は「褊激」（『宋書』顔延之伝）と評され、直言してはばかるところがなかったが、名利に対しては恬淡としており、過酷な権力闘争の世にあっても刑死することなく、免官や左遷を三度経ながらも最後は金紫光禄大夫にまで昇進した。その文士としての名声は当時にあっては謝霊運と並び称せられ、『文選』に収められる詩文も二十二篇に及ぶが、彫琢の美を追求した修辞至上主義的な作品には彼が生きた現実の反映は見られず、一部を除いて今日ではさほど評価されていない。

「赭白馬賦」はどうか。これは元嘉十八年（四四一）、宋の第三代の文帝に仕えていた五十八歳の時の作であることが「惟れ宋の二十有二載」と本文中にあることからわかる。『文選』李善注には「宋の文帝の十七年なり」と注するが、宋が建国された永初元年（四二〇）から二十二年めは元嘉十八年になるはずだという繆鉞「顔延之年譜」（『繆鉞全集第一巻（下）氷繭庵読史存稿』河北教育出版社、二〇〇四年）に従う。なお李佳『顔延之詩文選注』（黄山書社、二〇一二年）でも元嘉十八年とする。元嘉十一年に永嘉太守に出された時、「五君詠」を作って実力者たちの怒りを買い、七年間世間との交わりを絶った後に、文帝の第二子

始興王濬の後軍諮議参軍として復帰した頃の作であろう。

いずれにしても「赭白馬賦」はその序に「末臣庸蔽なるも、敢えて同に賦を献ず」[1]とあって、時の天子文帝に献上された作品である。すなわち文帝の愛馬である赤白まだらの駿馬――赭白馬の死を悼んだ応制の賦である。作品の概要を中国古典文学叢書排印本『文選』（上海古籍出版社、一九八六年）の分段に従って、序、第一段～第四段、乱の六つの部分に分けて見ておこう。

序は作品全体の序文であって、宋の天子の力が四方に及び赭白馬が得られたこと（序a）、赭白馬は才能を発揮したが老死して天子を悲しませたゆえ賦を献じること（序b）が述べられる。

それを受けて賦の本文に入る。その第一段は宋王朝の隆盛と赭白馬の獲得を内容とする部分であって、宋の武帝・文帝の治世は国力が大変盛んであること（一a）、歴代のすぐれた帝王の時代に神馬が現れたこと（一b）、宋王朝の場合も各地に勢力が及んで駿馬（赭白馬）を得たこと（一c）が述べられる。

第二段は赭白馬の優れた資質を記述した部分であって、赭白馬は並外れた外見・体格をしていること（二a）、その足の速さは尋常ではないこと（二b）、天子への恭順を教育され、美しい飾りをつけて巡幸に従うこと（二c）が述べられる。

第三段は疾走する赭白馬の姿を描写した部分であって、秋になると天子は士卒の武芸を試験し馬を品評すること（三a）、赭白馬は嘶いて疾走し、姿態を美しく変化させること（三b）、天子は赭白馬に乗って仙界を訪ねようとすること（三c）が述べられる。

第四段は天子の徳と赭白馬の死を記す部分であって、仙界を訪ねようとした天子は歴代の王の正しい道に鑑み、車を止めて思いをめぐらすこと（四a）、赭白馬を馬小屋に置いて老死するまでよく養ってやること（四b）が述べられる。

以上の本文のあとに最後のまとめである乱が置かれる。そこには、天子の徳に呼応して駿馬が現れたこと（乱a）、馬は非凡でよく天子のために身を捧げたこと（乱b）が述べられる。

このように「赭白馬賦」は名馬としての赭白馬を描くと同時に、このような馬が現れることを可能にした宋王朝の国力、さらにはこれをよく養った文帝を称えた作品といえる。したがって内容的には応制の賦ということもあり、とりたてて目を引くところはない。この賦が従来注目されて

きたのは、その修辞的な部分においてである。馬を描写した代表的な位置にあると同時に、ジャンルを超えて、後世の馬をテーマとする詩にも影響を与えた。

たとえば、赭白馬の尋常でない足の速さを述べた二bには、

旦には幽燕に刷い、昼には荊越に秣う。(2)

とある。ここに夜明けには北方の燕国で体を洗っていたかと思えば、日中には南方の越国でまぐさを食べているというのは、その並外れた足の速さを誇張するのである。

杜甫の詩「驄馬行」(『杜詩詳注』巻四)はこれを踏まえて、

昼洗は須らく涇渭の深きに騰がるべく、
朝趨は幽并の夜に刷うべし。(3)

と歌う。杜甫の場合は昼間、涇水・渭水の深みを飛び跳ねて足を濯いでいたのが、朝の走りは夜には幽州・并州で体を洗うことができるというので、方向は南から北へと逆だが、「赭白馬賦」の発想と語彙を用いつつ、馬の疾走を表現する。

また、李白の詩「天馬の歌」(『李太白全集』巻三)に、

鶏鳴に燕に刷い晡に越に秣う。(4)

とあるのも同様である。

以上を指摘するのは、宋・王得臣の『麈史』であって、その巻二には次のようにいう。

古えの詩を善くする者、善く人の語を用うること、渾然として己れより出ずるが若きは、唯だ李・杜のみ。顔延年の「赭白馬の賦」に云う、「旦には幽燕に刷い、昼には荊越に秣う」と。子美の「驄馬行」に「昼洗は須らく涇渭の深きに騰がるべく、夕趨は幽并の夜に刷うべし」と曰い、太白の「天馬の歌」に「鶏鳴に燕に刷い晡に越に秣う」と曰うは、蓋し皆な顔の賦より出ずるなり。退之の「李杜文章在り、光焰万丈長し」と曰うは、信なるかな。(5)

ここでは「赭白馬賦」に出る語を、李・杜があたかも自分が生みだしたかのように自在に用いていることを、韓愈の「張籍を調る」詩も引きながら称賛するのだが、それは見方を変えれば、「赭白馬賦」がそれだけ大きな影響力をもった作品だということでもあろう。

ただ上述したとおり、その影響はあくまでも表現上にとどまる。内容上の価値については否定的な評価が一般的である。たとえば高橋和巳「顔延之の文学」では、「赭白馬賦」を「賦のジャンルにおける顔延之の代表作」としながらも、

意味的内容は実はまことにつまらない。顔延之自身の愛玩動物ででもあったのならともかく、帝に命じられて古事をつらね想像をかき立てて書いた美辞麗句に感情のこもるはずはないからである。だが、初源から幾分そうした傾向は内包していたとはいえ賦は劉宋時代にはまさしくこの顔延之の作品のようになっていたのであり、そして以後は江淹や庾信などなにほどかの新味を出す作者があらわれはしたが、この「赭白馬の賦」が示す方向に進むことによって、制度的にはなお唐初まで第一級文学の位置を保ちつつ、以後文学的生命を急速に失っていったのである。(6)

と、この時代の極度に修辞主義に傾斜し、それゆえに後世ふり返られなくなる作品の代表に据える。

また馬積高『賦史』(上海古籍出版社、一九八七年)でも、謝霊運との比較において、

顔延之の詩文は時に過度に彫琢が施されて、生き生きとした情趣にはやや欠け、彼の「赭白馬賦」にはそうした欠点が見られるが(顔の賦ではこの一篇のみが完全な作品で、その他はみな断片である)、謝霊運の方は洗練された表現の中に自然な味を出せており、その完成度は顔延之にまさっている。(同書二〇〇頁)

と述べ、「赭白馬賦」は修辞本意で情趣に乏しい作品と見なされている。

大上正美「顔延之論」の言葉を借りれば「形式として宋室賛美と自己卑下が先験的に存在」し、「現実と自己との関係を問う構造を欠いた作品群」の一つといえよう。(7)

三、「赭白馬賦」と「雑説」の関係(一)

「赭白馬賦」の特色を以上のようにおさえた上で、その対極にある「雑説」との関係を考えてみたい。

「雑説」は有能な人材が登用されない現実を伯楽に見出されない不遇な名馬に喩えて訴えた散文である。短い作品であるから、その全文を訓読で示しておこう。

世に伯楽有りて然る後に千里の馬有り。千里の馬は常に有り、而れども伯楽は常には有らず。故に名馬有りと雖も、秖だ奴隷人の手に辱められ、槽櫪の間に駢死し、千里を以って称せられざるなり。馬の千里なる者、一食或いは粟一石を尽す。馬を食う者、その能千里なるを知って食わざるなり。この馬や、千里の能有りと雖も、食飽かず、力足らず、才の美外に見われず、且つ常の馬と等しからんと欲すれども、得べからず。安んぞその能千里なるを求めんや。之に策つにその道を

以ってせず、之を食うにその材を尽す能わず、之に鳴けどもその意に通ずる能わず、策を執って之に臨んで曰く、天下に馬無しと。ああ、それ真に馬なきか。それ真に馬を知らざるか。(8)

先に、不遇な名馬と伯楽との出会いというモチーフから「楚策」が「雑説」の原型になっていると述べたが、その影響関係が最も感じられるのは、「之に鳴けどもその意に通ずる能わず」の部分である。

『詩経』小雅・「車攻」に狩りを終えた馬の和らいだ様子を「蕭蕭として馬鳴く」と歌うように、そもそも馬の嘶きは伯楽と関係するものではなかった。「楚策」はこれを伯楽と結びつけて、伯楽と出会った名馬（驥）が喜ぶさまを次のように述べる。

驥是に於いて俛して噴し、仰いで鳴き、声、天に達し、金石より出ずるがごとき者は何ぞや。伯楽の己れを知るを見て欣べばなり。(9)

名馬はうつむいてため息をついた後、仰ぎ見て、天に届くほどの、鐘や磬を鳴らしたかのような声で、高く嘶く。これを受けて、三国魏の曹植の自己推薦文「自試を求むる表」（『文選』巻三七）では「臣聞く騏驥長く鳴いて、伯楽その能を昭らかにすと」(10)といい、東晋の劉琨は部下の就職を励ました「盧諶に答うる詩幷びに書」に「昔、騄騏、輈に呉坂に倚りて、良・楽に長く鳴けるは、知ると知らざるとなり」(11)という。「騏驥」も「騄騏」も名馬をいう。劉琨の方はやや意味がとりにくいが、塩車を引いて呉坂を上ると轅に寄りかかって進めなかったのが、王良・伯楽に出会ってひとしきり嘶いたのは、おのれの価値を知る者に出会うのと知られないままとでは大きく異なるということ。これは現行の「楚策」にはない「呉坂」や「王良」が見えるものの、やはり「楚策」の故事の延長上に位置づけられる。

したがって「雑説」に登場する「千里の馬」が「之に鳴けどもその意に通ずる能わず」というのは、「楚策」を逆に用いて、本来、伯楽が名馬の価値を見抜き、気持ちが通じあった場合に馬が嘶くはずなのに、気持ちをわかってもらうことができぬままに空しく嘶いている名馬の苦境が強調されているのである。

「赭白馬賦」ではどうか。三b、嘶いて疾走する赭白馬を描写した部分に、

影を睨んで高く鳴き、将に超えんとして中ごろ折まる。(12)

という描写が出てくる。秋に天子が士卒の武芸を試すために馬を競争させる場面である。馬は自分の影を横目で見てひときわ高く嘶き、その影を飛び越えようとするが途中で

やめる。もしこれが「楚策」を踏まえた表現なら「高く鳴」くとは伯楽に気持ちが通じた喜びを表すはずである。しかしここはそうはならない。ちなみに李善は「影を睨」むことに関しては『相馬経』より「馬、影を眄んで視る者有り」という一節を引くが、「高鳴」には注をつけない。五臣注（李周翰）には「馬、影を視て高く鳴く有れば良馬なり」とあるが、その基づくところは明らかでない。あるいは「楚策」の文脈とは無関係であることを示すために苦しい説明を加えざるを得なかったとも考えられよう。

このように同じような事柄を述べながら、「雑説」と「赭白馬賦」ではそれが踏まえる文脈が異なっている。そのことをさらにみてみたい。

四、「赭白馬賦」と「雑説」の関係（二）

「赭白馬賦」の序bでは「賦」が書かれるに至る事情が述べられているが、赭白馬が年老いて馬小屋の中で死に、若い時には天子のために力をつくし、今は天子を悲しませていることを、

歳老い気殫きて、内棧に斃る。少くしてその力を尽し、上仁を惻ましむる有り。[13]

という。

この中でまず「内棧に斃る」という表現について考えてみる。これは普通には『荘子』馬蹄篇の次の部分を踏まえる。すなわち人為を加えない野性の馬こそ馬の本来の姿であるという文脈を受けてこのようにいう。

伯楽に至るに及んで曰く、「我れ善く馬を治む」と。之を焼き、之を剔り、之を刻り、之を雒し、之を連ぬるに羈馽を以ってし、之を編むに皁棧を以ってして、馬の死する者十に二三。[14]

これは伯楽が馬をよく養うと称して、その皮を焼き、毛を剃り、蹄を削り、烙印を押し、たづなで繋ぎ、馬小屋に並べ、十頭のうち二三頭は死なせてしまうことを述べている。「皁」は陸徳明の『荘子音義』によれば「櫪なり。一に云う、槽なり」とあるから飼い葉おけのことであり、また崔譔の注を引いて「馬閑なり」とあり、馬小屋をいう。また「棧」は「木を編んで作り、霊牀の似きを棧と曰う。以って湿を禦ぐなり」とあり、屍をのせる牀のように木を組んであげ床にし、湿気を防いだもので、崔譔の注には「木棚なり」とあるのも併せ考えると、要するに床部分に板をわたしてある馬小屋であろう。

いずれにしても『荘子』を踏まえると、馬小屋に繋いで十頭中、二三頭が死ぬという否定的文脈になるはずだが、

「赭白馬賦」の「内桟に斃る」は、終生馬小屋で養われ棄てられなかったという肯定的文脈で読まれなければならない。よって李善は典拠として『荘子』を出しながらも、ただ「伯楽曰く、『我れ善く馬を治む』と。之を編むに皁桟を以ってす」とのみ本文を引き、「馬の死する者十に二三」の部分は割愛する。さらに「桟は櫺牀の若し。之を湿地に施すなり」と司馬彪の注を添える。「櫺牀」は欄干のある寝台であって、湿気を防いだ馬小屋で大切に養われていた方向で読ませようとする意図がにじむ。

それに対して、「雑説」で「槽櫪の間に駢死」するのは、「奴隷人の手に辱められ」た結果だから、同じ馬小屋でも悲惨な死を意味し、肯定的文脈ではありえない。そしてその「槽櫪」という場所が、活躍の機会を得られない不遇な雌伏の場と意識され、「雑説」がその伝統を受け継ぐことは「前論」で論じたとおりである。

続いて「少くしてその力を尽し、上仁を惻ましむる有り」の方も検討しよう。ここは『韓詩外伝』巻八に見える田子方の故事が踏まえられる。

昔者田子方出でて、老馬を道に見る。……御曰く、「もと公家の畜なり。罷れて用を為さず、故に出だして之を放つなり」と。田子方曰く、「少くしてその力を尽し、老いてその身を棄つるは、仁者は為さざるなり」と。束帛もてして之を贖う。[15]

疲れて役に立たなくなったために道に棄てられた王室の老馬を、「若い時に力をつくした者を老いたからといって棄てることは、仁者はしない」と言って田子方が絹五匹で購ってやる故事である。「赭白馬賦」で天子を指して「上仁」、最上の仁者と称したのは田子方の言葉を響かせるためである。田子方のようにかつて力を尽した老馬を最後まで棄てずに養うと、天子を称えるのである。よって李善注も多少の異同はありつつも、『韓詩外伝』をほぼそのまま引いている。

一方「雑説」ではそもそも「力足らず」、よって「その材を尽す能わず」という悲惨な名馬の現状を描くのに終始している。従って田子方の故事がここに入る余地はなく、「赭白馬賦」と比べると、天子に養われる老馬から「楚策」に依拠する不遇な名馬の方向へ戻したといえよう。

五、天馬の到来と「天馬歌」の影響

このように「赭白馬賦」と「雑説」という二つの作品はそのジャンルの違いもさることながら、制作の背景や意図も全く異なることによって、同じく馬をテーマとしながら

もそこに描かれる馬の像は全く重ならない。ことに名馬が題材となる時、そこには伯楽と不遇の影がまとわりつき、「楚策」から「雑説」に至る一連の系譜の作品が書かれたが、「赭白馬賦」はその系譜には収まらない。表現としてなぜそれが可能だったかを考える時に浮かび上ってくるのが、漢の武帝の時代における天馬の獲得である。

武帝が『易』によって占ったところ、神馬が西北から来るとあり、果たしてのちに張騫を烏孫に派遣して良馬を得て「天馬」と名づけた。さらには大宛からはいわゆる汗血馬が得られたため、烏孫の馬は「西極」と改名し、大宛の馬を「天馬」と称したという。[16]

『漢書』礼楽志には武帝が郊祀の礼を定め、楽府を立て、李延年を協律都尉として、司馬相如らの詩賦をもとに音階を調和させて、十九章からなる「郊祀の歌」が作られたとある。[17]その第十章は「天馬」（以下、「天馬歌」と称す）であって、天馬の美しい肢体やすぐれた能力、天馬がどのように得られたかなどを歌っている。

西域から到来した天馬は馬に新たなイメージを付与するとともに、馬と皇帝との結びつきを強めた。「赭白馬賦」は馬を通じて天子を賛美する作品であるから、当然「天馬歌」を踏まえて作られたのであろう。

歴代のすぐれた天子の世に神馬が出現したことを述べた一bに、

漢の道亨（とお）りて天驥 才を呈（あら）わす。[18]

とあるのは、武帝の徳が西域に達して得た天馬が才能を発揮したと解釈できる。そして李善はこの部分の注に「天馬歌」より「天馬来たること、西極従（よ）りす」[19]の一節を引く。

天馬は西域からやって来て漢の天子に出会い、その才能をいよいよ現わす。他方、伯楽に出会えず、不当な扱いを受けた「雑説」の名馬は、「才の美外に見（あら）われず」、活躍の機会は訪れない。

また疾走する赭白馬を描写した三bに、

膺門沫（あら）うこと赭（あか）く、汗溝に血を走らしむ。[20]

と、その肢体の変化を述べている。「膺門」は馬の胸、「沫」は本来は顔を洗う意だが、ここでは汗が流れる意か。「汗溝」は馬の前方の腋、そこに血のような赤い汗を流すのである。これが「馬、血を汗にす」[21]という大宛の汗血馬から来ることはいうまでもないが、より直接には、やはり李善注が引く「天馬歌」の一節「霑（うるお）える赤き汗、沫（あら）い流ること赭（あか）し」[22]を受けるだろう。

ところで「雑説」が依拠する「楚策」では塩車を引いて太行山を上る馬の苦しげな様子を「蹄申（の）び膝折れ、尾湛（たた）え

肬潰れ、汁を漉し地に灑ぎ、白汗交も流る」[23]と述べていた。汗のために尾は湿って皮膚はただれ、噴き出た汗の泡は地面にこぼれ、体じゅうに白く濁った汗が流れる。この「白汗」は分不相応な労役の苦しみであった。「赭白馬賦」は汗の色を赤く変えただけでなく、「天馬歌」を踏まえ、汗が持つ意味も美しく転換したのであった。

六、漢代の「賦」との関係

最後に漢代の「賦」の影響について少しだけ触れておきたい。

「赭白馬賦」の四aに、赭白馬に乗って仙界を訪ねようとした天子が、歴代の王に思いを致して車を止め、思いとどまる描写がある。

然れども遊畋を般しんで、前王に鏡みるを作す。人上に肆にして、悔いを義方に取る。天子は乃ち駕を輟めて慮りを廻らし、徒を息ませ装いを解く。[24]

狩猟を楽しみつつも、前代の王者を鑑とし、民の上ではほしいままにふるまう一方で、正しい道に従って反省する。そこで車を止めて前の王が遊楽により国を亡ぼした教訓を回想し、随行の者を休ませ、旅支度を解くのである。

こうした発想は狩りを主題としながらその贅沢を戒める漢賦、具体的には司馬相如の「子虚の賦」（『文選』巻七）や「上林の賦」（『文選』巻八）の影響が考えられる。天子に対して遊興に溺れず、道徳を保持するべきだと暗に諭しているのは、揚雄の「甘泉の賦」（『文選』巻七）などとも軌を一にする。とはいえ、司馬遷が「此れ詩の風諫と何ぞ異ならん」（『史記』司馬相如列伝論賛）と司馬相如を称賛したような、『詩経』以来の諷諭性はそこには感じられない。「赭白馬賦」の場合、それはあくまでも天子の盛徳を賛美するための描写にすぎない。

ところで「賦」と「説」とはジャンルを異にしながらも実は深い関係を有する。戦国時代の「説」は相手を説き伏せる弁論の技術といえるが、それが次第に定型化し、表現を洗練する文芸としての面に意識が向かうと、漢代の「賦」へも連なっていく。[25]背景には秦漢における統一王朝の出現とともに遊説の必要性を失った弁論家たちが、その文辞によって権力者に召し抱えられ、宮廷文人として新たな活躍の場を得るということがあった。[26]そこで献じられる文芸が「賦」である。

先秦における弁論の「説」は一つの方向としては唐代までに一旦途絶えた後、韓愈や柳宗元によって古文体の「説」として再生されるが、もう一つの方向は「賦」とい

う別なジャンルとして発展をとげたといえる。つまり「楚策」は「雑説」の原型であるとともに、血筋からいえば「赭白馬賦」の遠い起源である。しかし「赭白馬賦」が結果的に全く異なる表現として「楚策」の影をとどめぬものになったのは、これまで見てきたとおりである。

七、むすびに代えて

「赭白馬賦」は汗血馬の到来やそれを賛美した「天馬歌」に着想し、また『荘子』馬蹄篇など旧来の典故の一部を巧みに読みかえることで、『戦国策』楚策以来の「不遇な名馬」の文脈を払拭した。これは先秦に起こった弁論の「説」が発展、分化した流れである。

これをその句表現を受け継ぎつつも「不遇」の文脈に戻した人は杜甫である。そのことは吉川幸次郎氏がすでに次のように指摘している。

杜の馬の詩のいくつかにつき、注意すべきこと二つ。一つはしばしば「士不遇」の比喩とする。……二つはその語彙が、しばしば「文選」に由来することである。ことに……宋の顔延之の「赭白馬の賦」、……更にさかのぼって、漢の「天馬の歌」、また「荘子」の「馬蹄」篇など。しかしいずれも単なる継承でなく、早くからある語なり発想が、杜に独自なものとして充実し、生まれかわる。(27)

韓愈の「雑説」もそれに続いて『荘子』馬蹄篇や「楚策」を踏まえ、本来の「不遇な名馬」の文脈に戻した。「雑説」は杜詩と異なり、「赭白馬賦」とは語彙の上での影響もないことから、名馬という似たテーマを扱いながら互いに交わらない関係になっている。

先秦諸子による弁論の「説」は、曹植らによって単独の散文作品としてのジャンルへと展開したが、『文選』に収められることなく、一度断絶した。(28) その間に発展した一つのジャンルは「賦」であった。その一つが「赭白馬賦」である。「雑説」は杜甫の詩を媒介にしつつ、散文体によって先秦の「説」における「不遇」の文脈を復活させた。

唐代の古文は、まず形式の面からそれ以前の駢文という文体の転換を図り、さらに新ジャンルの開拓を行って散文で書ける内容を広げていった。しかしそれだけにとどまらず、作品の主題・文脈の上において先秦の諸子・説客の志を回復したといえるのではなかろうか。本稿はその様相の一端を、馬をテーマとして窺ってみたのである。

注

（1）末臣庸蔽、敢同献賦。以下、『文選』の引用は胡刻本による。
（2）旦刷幽燕、昼秣荊越。
（3）昼洗須騰涇渭深、朝趨可刷幽幷夜。なお『詳注』は「朝」を「夕」に作るが、宋本『杜工部集』によって改める。
（4）鶏鳴刷燕哺秣越。
（5）古善詩者、善用人語、渾然若己出、唯李杜。顔延年赭白馬賦云、旦刷幽燕、昼秣荊越。子美驄馬行曰、昼洗須騰涇渭深、夕趨可刷幽幷夜。太白天馬歌曰、鶏鳴刷燕哺秣越。蓋皆出於顔賦也。退之曰、李杜文章在、光焰万丈長、信哉。ここでの杜詩は「朝」を「夕」に作る。引用は四庫全書本による。
（6）引用は『高橋和巳作品集9　中国文学論集』（河出書房新社、一九七二年）三九二～三九三頁による。
（7）『阮籍・嵇康の文学』（創文社、二〇〇〇年）四〇九頁。
（8）世有伯楽然後有千里馬。千里馬常有、而伯楽不常有。故雖有名馬、秪辱於奴隷人之手、駢死於槽櫪之間、不以千里称也。馬之千里者、一食或尽粟一石。食馬者、不知其能千里而食也。是馬也、雖有千里之能、食不飽、力不足、才美不外見、且欲与常馬等、不可得、安求其能千里也。策之不以其道、食之不能尽其材、鳴之而不能通其意、執策而臨之曰、天下無馬。嗚呼、其真無馬邪。其真不知馬也。引用は東雅堂本による。
（9）驥於是俛而噴、仰而鳴、声達於天、若出金石者何也。欣見伯楽之知己也。
（10）臣聞騏驥長鳴、伯楽昭其能。
（11）昔騄騏倚輈於呉坂、長鳴於良楽、知与不知也。
（12）睨影高鳴、将超中折。
（13）歳老気殫、斃于内棧。少尽其力、有惻上仁。
（14）及至伯楽曰、我善治馬。焼之、剔之、刻之、雒之、連之以羈馽、編之以皁棧、馬之死者十二三矣。
（15）昔者田子方出、見老馬於道。……御曰、故公家畜也。罷而不為用、故出放之也。田子方曰、少尽其力、而老棄其身、仁者不為也。束帛而贖之。以上、引用は許維遹『韓詩外伝集釈』（中華書局、一九八〇年）による。
（16）『史記』大宛列伝に「初、天子発書易、云神馬当従西北来。得烏孫馬好、名曰天馬。及得大宛汗血馬、益壮、更名烏孫馬曰西極、名大宛馬曰天馬云」とあり、『漢書』張騫伝にも同様の記述が見える。
（17）至武帝定郊祀之礼、……乃立楽府、……以李延年為協律都尉、多挙司馬相如等数十人造為詩賦、略論律呂、以合八音之調、作十九章之歌。『漢書』武帝紀には、太初四年に李広利が汗血馬を得た時に「西極天馬之歌」が作られたとある。
（18）漢道亨而天驥呈才。
（19）天馬来、従西極。
（20）膺門沫赭、汗溝走血。
（21）「大宛列伝」に「大宛……多善馬、馬汗血、其先天馬子也」とある。
（22）霑赤汗、沫流赭。
（23）蹄申膝折、尾湛胕潰、漉汁灑地、白汗交流。

(24) 然而般于遊畋、作鏡前王。肆於人上、取悔義方。天子乃輟駕迴慮、息徒解装。

(25) 小南一郎「語から説へ――中国における「小説」の起源をめぐって――」(『中国文学報』第五〇冊、一九九五年) 参照。

(26) 馬積高『賦史』五四～五五頁参照。

(27) 吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注　第一冊』(岩波書店、二〇一二年)「高都護驄馬行」一三三頁。

(28) 曹植の「説」については、谷口匡「曹植の「説」について」(『中国文化』第六八号、二〇一〇年) 参照。

(京都教育大学)